社会教育委員ニューズレター　第14号

発　行　佐賀県社会教育委員連絡協議会
事務局　佐賀県県民環境部まなび課内

県社教委連第３回役員会

11月15日、３回目の役員会を県庁で開催しました。

協議事項として、令和３年度佐賀県社会教育委員実践研修会(案)について協議が行われました。冬季に第６波が来ると言われているので、コロナ感染予防に万全を期すため、新しい取組としてオンラインによるライブ配信を併せて実施することについて協議され、承認されました。

また、連絡協議会表彰について協議されました。運用要綱を設け、現役又は退任後１年以内の委員を被表彰者とすることについて承認されました。

報告事項として、全国大会の令和３年度石川大会及び令和４年度広島大会、九州大会の令和３年度長崎大会及び令和４年度大分大会、社教連表彰の被表彰者の決定について報告がありました。

九社連運営委員会・理事会

11月、書面により開催されました。

運営委員会の議案として令和２年度沖縄大会の収支決算報告、令和３年度長崎大会の収支予算案及び同大会の運営並びに令和４年度大分大会の開催について協議され、原案どおり承認されました。

理事会の議案として令和４年度の役員案が提案され、会長に次期開催県である大分県の盛本会長が選出されました。

全国社会教育委員連合総会

第１回（令和３年８月書面開催）

○第１号議案　令和２年度事業報告・決算報告について

令和２年度の理事会・総会はコロナ禍のため、すべて書面開催となり、事務局担当者会議も中止されました。

全国社会教育研究大会新潟大会は、県内在住者のみの縮小開催となり、全国にオンデマンド配信されました。地区別大会は、沖縄大会のみ県内在住者で縮小開催されましたが、その他の大会は中止・延期・記念誌作成になりました。

会費の値上げや大会等の縮小・中止等により経常損益は179万円の黒字になっています。

○第２号議案　第63回全国社会教育研究大会石川大会について

対面開催に向けて準備中。(その後、オンデマンド配信に変更)

○第３号議案　次期役員（理事・監事）の選任について

令和３、４年度の役員として九州からは、長崎県の池田会長、大分県の盛本会長が理事に選任されました。

第２回（令和３年８月書面開催）

○第１号議案　令和３・令和４年度の役員構成について

会長に鈴木眞理氏、常務理事に稲葉隆氏が選任されました。

第３回（令和３年12月書面開催）

○第１号議案　第64回全国社会教育研究大会広島大会について

令和４年度の広島大会は、令和４年10月26日(水)から28日(金)にかけて開催される予定です。コロナ禍により開催できない場合は、オンライン形式での開催を検討中です。

○第２号議案　第65回全国社会教育研究大会宮崎大会について

令和５年度の宮崎大会は、令和５年11月８日(水)から10日(金)にかけて開催される予定です。

○第３号議案　第66回全国社会教育研究大会の開催地区について

令和６年度は水戸市が予定されています。

県社教委連実践研修会

１月18日、令和３年度の実践研修会をアバンセホールにおいて開催しました。

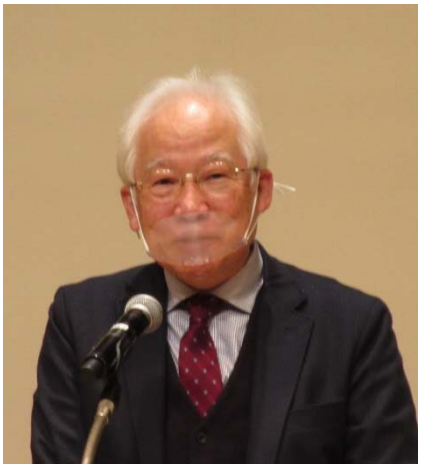
上野会長のあいさつ、全国社会教育委員連合表彰の表彰式の後、「佐賀の未来を拓く地域・学校・家庭のきずなづくりを目指して」

をテーマにトークセッションを行いました。

コーディネーターに上野景三会長、パネリストに瀬戸口裕県統括コーディネーター、田中裕子神埼市立千代田西部小学校長、小出洋佐賀市立小中一貫校富士校学校運営協議会会長をお迎えして、約２時間にわたってトークセッションを行っていただきました。その概要は、次のとおりです。

上野会長あいさつ

上野会長から研修会の冒頭に次のとおりあいさつがありました。



みなさん、こんにちは。本日はお集りいただきありがとうございます。さて、２年前の緊急事態宣言時に学校は休校になり、社会教育施設は休館になり、社会教育団体等の総会等も中止や縮小開催されました。子どもたちにはステイホームが言われましたが、ステイコミュニティと言われないのはなぜなのでしょうか。そこには社会教育や公民館の活動にまだ限界があるのかもしれません。

これまで学校教育と社会教育はいろいろな表現をされてきましたが、コロナ禍以前と以後ではまったくその様相が違っています。学生から、「今日は大学に行く必要がありますか」と質問されるようになりました。集まって顔を見ながら話をするということが段々とできにくくなりました。逆に言うと、集まることの意味を子どもたちは考えるようになったのです。

その影響は、おそらく社会教育についても同じではないでしょうか。これまでとは違った形の連携や協働というのが求められるような時代に入ってきたのではないでしょうか。今回の研修会では、その点について一緒に考えてみたいと思います。

表彰式

江北町の三苫紀美子さんが社教連表彰を受賞されました。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、表彰式が行われる全国大会への参加ができなかったため、実践研修会の場で表彰状の授与を行いました。

トークセッション

テーマ　佐賀の未来を拓く地域・学校・家庭のきずなづくりを目指して

最初に上野会長から、佐賀県社会教育委員の会議で議論されている提言案について、趣旨説明がありました。

パネリストの瀬戸口裕さんからは、統括コーディネーターとしての活動を通して感じたことについて紹介されました。

田中裕子さんからは、学校の視点から見た地域社会とのつながりについて紹介されました。

小出洋さんからは、佐賀市富士校のコミュニティ・スクールの活動について紹介されました。

それぞれの発言の要旨については、次のとおりです。

（上野）今回のテーマについて、

佐賀県社会教育委員の会議で議論を進めており、提言案を本日の資料に入れています。社会教育と学校教育は教育の両輪だと言われてきましたが、うまく回っていないところがありました。だから、うまく回るようにというのがこれまでの議論でしたが、新型コロナを経験した私たちは、新しい段階に入ってきているように思います。

ステイホームとはいいますが、ステイコミュニティと言われないのはなぜでしょうか。武雄市で子どもたちの居場所づくりをやっている方は、自治公民館を借りて週に１回ずつ駄菓子屋を開いておられます。「緊急事態宣言のときにも駄菓子屋を開いたのですか」と聞いたところ、「開いた」と言われました。「子どもたちは居場所がないからここに来ているのに、ここを閉めてしまったら居場所がなくなるでしょう」と。地域との日常的な信頼関係があるのでなんの問題も起きなかったと言われました。私の近所では、子どもが公園にちょっと遊びに行っただけでも咎められると聞いたことがあります。ステイコミュニティを言葉だけではなく、子どもたちの大切な居場所として実践されている方がいらしたことに励まされました。こういうことを社会教育委員はもっと知って、もっと地域の中にこういった活動を広げていく責任があるという思いで、提言をまとめているところです。

今、学校教育はGIGAスクールに変化していこうとしています。子どもたち一人一人に端末が配布され、子どもたちはWi-Fi環境さえあればどこでも勉強ができるようになりました。将来的には学校に行く必要性が少なくなるかもしれません。集団活動をするときだけ学校に行くように変わるかもしれません。

文科省のいろいろな答申を見て、学校改革のスピードに地域や社会教育がついていっているのかと思うことがあります。学校が変わるのであれば、社会教育ももっと変化していくことが求められるのではないでしょうか。そういう議論を、私たちはどれぐらいしているのでしょうか。これからの時代、学校教育の変化に伴う社会教育の変化や地域社会の変化が迫られ、10年たったときには大きく変わっていることでしょう。今日の研修会を、今から少しずつその議論を始め、知識をお互いに共有し行動に移していくスタートにしていきたいと思います。

（瀬戸口） 私は、佐賀県の統括コーディネーターをしています。各市町や学校を訪問し、地域学校協働本部の構築について指導助言を行っています。今日は、その訪問を通して私が感じていることをお話しします。

地域学校協働活動は、学校と地域を結ぶ活動、高齢者や保護者、ＰＴＡ、ＮＰＯ、民間企業、団体等が参加して学校を核とした地域づくりを進めていきます。子どもと地域住民が一緒に活動していくものです。登下校の見守り、読み聞かせ、授業補助、農業体験、地域行事の合同開催、郷土学習、戦争体験講話等を行います。

これらの活動はどこでも行っていると思われるでしょうが、これまでは一人の方の力、あるいは学校がお願いして活動を行っていました。子どもたちは、体験活動を通じてどんどん成長します。保護者や地域の人が見守ることで、子どもたちはやる気を持って、学力も向上していく面もあります。教職員も、自分ができないことを地域の方にやってもらうことで働き方改革にもつながります。地域の人は、学校に来ることで生きがいを感じる。そういうメリットがこの活動の中にはたくさんあります。

しかし、個人の力だけでは継続が難しくなります。これを組織化していくのが地域学校協働本部です。これをぜひ市町や学校で作っていただきたい。大きな組織を作って人を集めて活動をしていくのではなくて、今の活動にコーディネーターを入れる、多様な活動ができるように組織として動いてもらう、そして、それが継続的な活動になる。この３つの要件が整えば協働本部として活動できます。

県内の協働本部やコミュニティ・スクールの設置状況は、全国と比べると低い状況です。活動自体はある程度実施されていても、

それが継続的に、発展的にできるような本部を作っていくことがまだできていません。少しずつ理解が進んで、設置が増えてきている状況ではありますが。

市町によって全然状況が違っています。すでに実施しているとかできているということで、なかなか進まない市町もあります。小さな町だと、常に顔を合わせているのでわざわざ組織を作る必要はない、新たな組織を作るのは大変だ、コーディネートをする人材がいないとよく言われます。また、人事異動で担当者が代わるとつながっていきません。それから、高齢化で去年まで実施してくれた人がいなくなり、活動自体が実施できないという問題もあります。ぜひ本部を作って組織化していくことによって、そういうデメリットをなくしていっていただきたい。

すでに設置されている市町や学校のコーディネーターのお話では、地域の人に見守られることで指導が行き届くし、子どもたちはやる気を持って学力の向上にもつながると聞きます。そして、地域の人とのつながりができるので、地域理解が進んでいく。子どもたちの中には、地域に貢献できる人間になりたいと言う子どももいると聞きました。また、協働活動に参加された方は、生きがいを持って「次も出てくるよ」と、どんどんやる気を持って出てきてもらっているそうです。このように地域全体が活性化していくことにも貢献できます。

ぜひ皆さんにも市町等に導入を働きかけてほしい。そして御自身もコーディネーターとして参加していただいたり、身近な人にコーディネーターになっていただくことができれば、この活動がどんどん進んで、佐賀県がもっと、地域と学校がつながった県になっていくのではないでしょうか。

（上野）訪問先の反応はどのような感じですか。

（瀬戸口）私たちが訪問した段階で、話は聞くが最初からこれには対応できないというところもあります。理由としては、担当者の方たちに余裕がないこと、予算や人材の有無でスタンスが違います。そこを何とか切り開くことが今の課題です。

（上野）実情はどの市町でも同じでしょうが、それでも積極的に導入していこうというところが少なからずあります。その要因は何ですか。

（瀬戸口）教育長が活動に前向きなところは、どんどん進んでいます。そして、元々学校と地域のつながりが強いところはすぐに取り入れられやすいです。

（上野）子どもの見守り隊をしているところで、高齢化でできなくなったと言われるところも少なからずあるようです。また、読み聞かせグループもコロナ禍で活動できなくなってしまって、数年後に再開しようとしてもできるかどうかは心配です。今はうまくいっているからいいのではなくて、10年後に向けて今どういった種をまいていくことができるかという話だと思います。

（田中）学校の視点から見た地域社会とのつながりということで、話をさせていただきます。地域の方とのつながりが、少子高齢化も一因ですが、コロナ禍を経て変わりつつあります。学校もまた大きな変革の時にあり、学校と地域をつないでいくためにどうしたらよいのか、少し具体的に見ていきたいと思います。

１つ目は、佐賀県のコミュニティ・スクール導入率は全国平均とほぼ同じで、少しずつその良さが認知されつつあります。どの市町も導入を本格的に検討していく時期に入っていると思います。

２つ目は、学習指導要領の理念にある「社会に開かれた教育課程の実現」のためには、「よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有する」、地域と連携協働することが大切なことだと考えます。

３つ目は、学校の働き方改革です。行事等の簡素化はどこの学校でも進められていますが、地域行事に参加することだけが連携ではなく、連携内容の充実が求められています。

４つ目は、GIGAスクール構想の実現です。１人１台タブレットの活用が当たり前、デジタル教科書ももう目の前に来ています。地域

とのつながり方もオンラインでつながるようになっていくでしょう。

神埼市では、学校と地域をつなぐための取組として、「おむすびチーム」というボランティア組織、「ドリームパーク」という放課後子ども教室、放課後児童クラブの３つがあります。おむすびチームは、朝のスキルタイムや授業の補助に活躍されています。放課後子ども教室は、学ぶ・遊ぶ・作るという３つの視点から、様々な大人が子どもたちと触れ合い、多様な経験をすることができる時間となっています。放課後児童クラブは、異学年とも触れ合える家庭的な雰囲気を持つ場として機能しています。児童クラブと学校との間で情報交換を行ったり、学校だよりで学校の様子をお知らせしたりしています。

小城市立砥川小学校は、地域連携が緊密になされています。地域連携室「こみっとがわ」が校内に設置され、常時１名の地域連携推進委員がいます。元保護者で、地域に愛着があり、学校教育への理解もある方が推進委員になっています。授業補助、授業以外の補助、環境整備等を行っています。いかに教育課程に地域との活動を入れ込んでいけるかが課題です。具体的には、家庭科の補助、町探検の随行、水泳指導の補助、稲刈り体験等を行っています。砥川は石工の里としても有名で、保存会から４年生が地域学習として学んでいます。この学習を通して子どもたちは地区のよさに気づき、伝統を引き継ぐという気持ちになります。最後に石工カレンダーを１人１枚作成し、産業まつりで保存会への寄附を募っています。キャリア教育として、様々な職種の保護者や地域の方にお話しいただき、授業以外でも、将棋倶楽部、音読や九九の検定タイム、読み聞かせ等で地元の方との交流がありました。

このようにうまく回っていくには、推進委員の存在が鍵になります。推進委員には、人材の発掘、学校との橋渡し、生きがいづくりという３つの大事な役目があります。また、活動を継続するには、会員同士の情報交換、親睦を深めることが大切です。砥川の特徴は、地域連携がまさに学校の教育活動の核になる、非常に緊密なつながりがある、地域社会の絆づくりに役立っていることが挙げられます。

最後に、学校と地域の連携について新たな取組を紹介します。神埼市立西郷小学校は、昨年度から県教育委員会の研究指定を受け、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の研究指定を受けています。６年生の総合的な学習の時間に取り組んだ「持続可能な西郷の町のためにできることを考えよう」について紹介します。学校や地区内でＳＤＧｓに関連したものを探し、自分でテーマを見つけ、自分で調べます。尾崎人形や農業などについて、自分たちで聴き取りしながらまとめ、地域の方の前で発表を行いました。子どもたちは、地域のためにできることがある、自分の力が役に立つことがある、社会と関わるということで、自分がやってきたことに自信を持ち、社会参画意識の高揚につながったと考えています。人が変わっても続けられるように、コミュニティ・スクールのような組織があると更に盤石になると思いました。

（上野） 地域の方が関わることによって、子どもたちの育ちに違いが出ると感じられることがありますか。

（田中） 最近の勤務校は、地域の方の関わりが多いところがほとんどでした。そこで感じたことは、子どもたちの地域や大人への親和性が高いということは、学校職員に対しての親和性も高く子どもがオープンだということです。ひいては学校職員との信頼関係や学校教育がスムーズにいくことにつながっていると感じています。

（上野） 保護者の中には、子どもたちの学力がそれで上がるのかと疑問に思う方もいらっしゃいます。地域の方と一緒に取り組むことによって、子どもたちの学力は本当に上がるものですか。

（田中） 当初、西郷小でＥＳＤの研究指定を受けるにあたり、主に総合的な学習の時間で研究をすると説明したときに、地域の方から総合的な学習の時間の指定を受けても学力と結びつくのかという質問を受けました。今の学習指導要領は教科学習で学んだことを活用して総合的な学習の時間で探求していくという流れになっているので、今回の指定を受けることは国

語・算数の力を同時につけていくことになると答えました。直結はしないかもしれませんが、間接的にはプラスのほうに働いていることを実感した1年でした。

（上野） 私も地域に開かれた学校を見学した際に、初対面なのに生徒がいろいろ質問してきた経験をもっています。校長先生によると、生徒たちは大人に自分が分からないことを何でも聞いていいと思っており、そのことが学ぶ意欲を育てていくと聞いたことがあります。地域の人たちが出入りすると、子どもたちの学習の妨げになると思ったりもしましたが、それが当たり前になってくると、子どもたちはいつも自分たちは大人たちに見守られているという安心感があり、それが授業を落ちつかせ、授業に集中することができるようになると話されました。地域の力が直接的に何か効果を及ぼすというよりは、間接的に、そして何か土台づくりをしていくような役割を持っているなということを感じました。地域学校協働本部を作っていくことで、子どもたちの学びを下支えしていくことができる、これだったら自分たちもやっていると思われた方もいらっしゃるでしょう。

しかし、田中校長は、それだけでは駄目だろうと指摘されました。というのは、コーディネートが必要だということですね。砥川小では、地域連携推進委員が校区をコーディネートされているようですが、公民館分館と書いてありました。学校の中に公民館分館をどうやって作られたのですか。

（田中） 前の校長が社会教育に造詣があり、地域と結ばないといけないという信念をお持ちで、この地域連携室を立ち上げられ、市に働きかけて公民館分館にされたと聞きます。

（小出） 佐賀市の富士校区で、学校地域連携支援事業の地域教育コーディネーター、そして学校運営協議会に携わっています。富士校は小中一貫校ですが、一体型の学校ではなく、学校間の移動にバスを使っています。小学校が約90名、中学校が約40名で一貫校になって日が浅く、市町村合併もあり、保護者や地域の方の学校運営に対する思いがあまりないような感じです。

ほぼ毎日3時間勤務しています。毎朝、校長とバス停近くに立って子どもを迎えました。子どもの挨拶の様子を見て子どもの心の様子や健康の状態がよく分かりましたので、それを担任に伝えていました。

私が関わってきた活動内容を中心に紹介します。町内の各施設に見学する際に、若い先生が多く土地の事情を御存じないので、関係者との調整を手伝いました。たとえば、菖蒲地区のお母さんたちが立ち上げた菖蒲御膳を出すお店に小学生が行って地元の山菜について話を聞き、嘉瀬川ダム周辺を散策しながら山菜を調べ、最後に山菜料理をいただく活動をしました。私がその方たちと親しい関係で調整しました。そのほか公民館通学合宿、地域の方との学校周辺のごみ拾い、古湯映画祭やハーフマラソン大会の企画運営への参加、職場体験、絶滅危惧種のミヤマアカネというトンボの保全活動（清掃活動、観察会、勉強会）、富士校体育大会、保育体験、文化発表会、お屠蘇作り、植菌作業体験、野菜づくり体験（通年）、七草体験、米づくり体験、俳句づくりなど、関係者との調整や地元の方の参観の募集を行ったりしています。

家庭とはある程度うまくつながるようになりましたが、地域との連携はまだまだという思いもあります。それで、回覧版やメールで学校の活動の様子が分かるように情報を伝えています。ほとんどの地区が限界集落になっているような状況で、少し元気が出るようにしたいなと思っています。昨年、まちづくり協議会の準備委員会ができて、やっと組織ができてきたのかなと思っています。

課題として、バス路線が廃止されることになり、子どもたちの安全確保に向けて、今後地域や学校と話合いながら進めていかなくてはいけません。また、限界集落がほとんどになって、郷土芸能等がどんどんなくなってきています。子どもがいないため、今後どうしていくのか案じているところです。

（上野） バス停に立っていると、子どもの心の様子などが分かると

話されましたが、それは教員をされていたから分かったのでしょうか、それとも地域の大人だったら誰でも感じ取れるものでしょうか。

（小出） 続けていけば、分かるようになるかなと思います。

（上野） お話の中で家庭とつなぐとありましたが、普通は家庭の中のことはなかなか分かりません。地域の方とは知り合いになっていくことはできますが、子どもの様子を見て家庭のことが分かるというのは、なかなかのものです。継続していたからこそ分かるものなのか、富士町に生まれ育って、次の世代を責任持って見守っていかないといけないという強い責任感と自覚なのでしょうか。逆に言うと、教員でなくても子どもの成長を見るのが嬉しいと思われる方がいるはずですが、そういった方々の思いをどう集めていくかということが、今回のポイントにもなってくるのではないでしょうか。

（会場から） どの市町も理解がない職員はおそらくいないでしょう。当初、ものすごいものを立ち上げなければいけないというイメージを持ってしまったからだと思いますが。

（瀬戸口） 担当者に聞きますと、最初はものすごくハードルが高かったようです。今は取り組みやすくなってきています。市町に話していくと、それならやれそうだという反応が多くなってきました。将来ぜひ取り組んでいきたいという声も多くなってきました。

（田中） 神埼市は非常に効率的な取組をされていると思っています。７つの小学校で同じプランで行っていますので、どの学校も一定の地域とのつながりができています。学校としてはそれに甘んじることなく、独自でまたさらに地域とのつながりをやっていかなければと思っています。

（上野） 放課後児童クラブも放課後子ども教室も長い歴史があります。市町村合併もあって家庭教育の向上のために、県の家庭教育支援等の事業の副産物として「おむすびチーム」ができていった経緯があります。そういった取組が、時間をかけて少しずつでき上がって今のような形になっています。地域学校協働本部も少し時間をかけていくと形になっていくのではないでしょうか。

（会場から） 鹿島市では、来年度から全ての小学校にコミュニティ・スクールが導入されます。地域学校協働本部も設立を検討しています。そこで、導入部分でどういうことが必要なのか教えていただきたい。

（田中） 来年からコミュニティ・スクールになるという学校にいました。学校には学校評議員会が必ずあります。この中に必ず地域の方がいますので、その方を核にメンバーを増やしていったことを記憶しています。公民館には人材バンクがありますので、アドバイスをいただいてメンバーを選出されてはどうでしょうか。

（瀬戸口） 嬉野市でコミュニティ・スクールの立ち上げを体験しました。学校評議員を基に運営協議会の委員が決まっていく、そしてその人たちを中心に本部的な活動につながって、うまく活動が推進されてきたと思います。中心になる方をどなたにするかが一番大切で、それによって活動がスムーズに行くように思います。年間の活動スケジュールを早めに決めて、学校側と受ける側が納得していれば、さらに発展、改善が行われていくでしょう。

（オンラインから） つなぐとか、つなげるとか、あるいはつながるというようなときに工夫されたこと、心がけたこと、地域性の違いで苦労したこと、今後の展望について教えてほしい。

（瀬戸口） つなぐということで一番大切だと思ったのは、その市町の状況を理解し合うことです。市町や学校によって状況が違いますので、状況を理解して提案すれば受入れてもらいやすくなるし、何回もそういう機会を作っていくことで、つながりを深めていくことができます。すると、それならできるということで踏み込んでもらえると思います。

（田中） 工夫していることは、とても小さなことですが、仲よくなることかなと思います。校長室はとても敷居が高いところがありますが、もっと気軽に来てもらえるよう活動後に校長室で地域の方とお茶を飲みながら様々なことをお話していました。大きな学校では

よくボランティアの人材バンクを作られていました。知り合いの校長は、毎年、保護者や地域の方にボランティアの募集を行うと言われていました。

今後の展望ですが、やはりこれからはデジタルの活用でしょう。子どもたちもタブレットで欲しい情報を取りに行く、画面を通して人と会っていくというのが当たり前になっていきます。そういう取組を更に広げ、本物のまなびを教室でもたらすということだと思います。

（小出） 学校に勤務していた時に肝に銘じた出来事が２つあります。１つは、赴任時に各地区の自治会長に挨拶に行きますと、誰も学校にはもう協力しないと言われたことがあります。赴任前に、学校内の固定遊具で子どもが大けがをして、学校の判断でそれを撤去したと聞きました。その遊具は、町民みんなで何日もかかって作ったものでした。そのために学校と地域が離れてしまっていました。もう１つは、別の学校で運動会のときに国旗を降ろさなかったということで揉めて、赴任最初の育友会との飲み方のときに地域の方が誰もいなかったことです。学校と地域、保護者が連携、協力していくためには、田中先生が言われたように、まず仲良くなることが大前提だと思います。

（上野） 今日のお話から、なぜ社会教育委員の立場で子どもたちのことに関わっていかなければならないのか、なぜ地域学校協働本部をやっていかなければならないのかと考えてみたときに、仕組みを作ることが目的ではなく、何よりも地域の中で子どもたちが安心して健やかに育っていくことを保障していくことが大事なのではないかと考えさせられました。

小出さんのバス停で子どもたちを見ていると子どもたちの心の様子などが分かるという話は、私も校長のときに校門指導していたので分かります。帰りも立つと学校での様子もよく分かります。しかし、今では子どもたちが今日は楽しかったとか、つまらなかったということを実感する機会がものすごく少なくなってきているのではないでしょうか。

小出さんはそこに住む１人の大人として子どもの成長は喜びだと言われました。そういう思いを持っている地域の大人たちはかなりの数いらっしゃるでしょう。そういった方たちを学校と結びつけていく、そういう思いを子どもたちの育ちに結びつけていくために、学校ではコミュニティ・スクールを作り、社会教育では地域学校協働本部を作っていかなければなりません。

最後に、皆さんに資料にある提言案を一読してほしいと思います。提言案には、行政職員に取り組んでほしいこと、学校に取り組んでほしいこと、社会教育委員に取り組んでほしいことを書いています。そして市町の社会教育委員の会議で意見を出してください。2030年を目指して学校が変わっていくとしたら、社会教育の在り方も変わっていくことができるように取り組んでほしいと思います。

（文責　事務局）

アンケートの内容

実践研修会後に記入していただいたアンケートの一部を御紹介します。（構成上、若干字句を変更しています。）

○トークセッションについて

・子どもの居場所づくりの活動をコロナ禍で休止しています。しかし、こういうときだからこそ必要ではないかと思いました。

・学校と地域が一緒になって子どもたちと顔見知りになり、地域の人に好意を持ってもらうことが大事だと思いました。

・地域学校協働本部のように、中心となってコーディネートする機関が必要であること、学校が主体となるのは異動があり人的確保がやはり難しいと思いました。そのときに市職の担当者がいるととても心強く継続可能になると思いました。

・コロナの影響で社会教育のあり方が新しい局面を迎えている。学校教育と共に車の両輪となるべく、日頃からの信頼関係の構築が重要であるということが印象的でした。できているようでできていない、簡単なようで難しいことだと思うので、改めて肝に銘じて今後の活動に活かしていきたいです。

・すでにコミュニティ・スクールの導入に取り組んでいるため、地

域学校協働活動の取組との違いや必要性について、今一つ理解できていなかったが、本日の研修会において「地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支える仕組み」の必要性について理解することができました。

○今後の活動について

・仕事柄、幼少の連携等を密にしていくことで地域・保護者(家庭)との橋渡しとなり、つながりを深めていけると思いますので、地域力を生かしていけるよう努力したい。コミュニティ・スクールをつくっていけるように。

・学校の応援団になれるよう、地域の橋渡しになれるよう頑張っていきます。

・地域の中で、子どもたちが地域に愛着を持ちながら、安全で安心して健やかに育つよう、サポートする人を増やしていきたい。

・以前コーディネーターを務めていたが、当時は地域を十分知っていない部分もありました。今は地域の一員として各種役職や活動で地域のことを知ることができていて、学校のことも知る立場で、連携のあり方や手立てを考えることができると思います。

・校区ごとにどのような連携活動ができるか整理してみます。また、自治会長会等に提案します。

・まずは「仲良くなる」ことに意識的に取り組んでいきたい。そのためにも、地域を知る、地域の人を知ることも大切だと思いました。また、今回の取組を地域・学校・家庭の連携事例として、様々な機会で話題にしていきたい。

・地域の人と子どもたちが関わる機会をもっと作りたい。地域の行事に多くの子どもが参加できるように計画します。毎朝子どもの登校時に見守りをしていて、子どもの成長がよく分かるようになってきました。

・新たに何かを始めることも大切ですが、今までやってきたことをもう一度見つめ直し、さらに効果が上がるように一工夫したり、価値づけや意味づけをしたりすることを行っていくことが重要であると感じました。継続を大きな力にしたい。

・これまで作り上げてきた地域とのつながりや行事を見直して、できているところをさらに充実させることが大切かと思いました。「全ては子どもたちのために」という一点で地域・家庭に協力をお願いしていこうと思います。

・我々見守り隊は、田舎のため、子どもとともに集団登校しています。しかし、高齢化のために、次の方への引継がなかなか困難な状況です。各団体の協力が必要です。

・自分にできることでと学校に関わってきましたが、組織作りをしてもっと活発に活動できるかなと思いました。

・地域のコミュニティづくりを企画推進するための人材と財政の確保と整備が必要であると考えます。

・まずは自分自身が県内の取組を知ることが大事だと思いました。地域の中には子どものために何かしたいと思う人は必ずおられると思います。その人たちをどのように見つけ、活動につなぐことができるのか、社会教育の出番かと思います。

・町では現在、町内の各地域において「地域づくり協議会」設立についての機運が高まりつつある。地域と学校と家庭をつなげていく仕組みづくりという点では、まさしく「地域づくり協議会」の中で取り組んでいける、取り組んでいくべきだと感じました。

○ハイブリッド開催について

・映像、音声ともに問題なく、とても快適に参加できました。アンケートはフォームなどで回答できると、オンライン参加者も提出しやすいと思いました(来場者へは、フォームのＱＲコードを配布し、その場でスマホを利用して回答してもらうことも可能)。

・コロナ禍での感染防止対策として必要な措置であると思います。アフターコロナとなっても、移動の負担等を考えると、その軽減のために選択肢としてあるべきではと考えます。

・必要に応じて資料とステージの両面切り替えがあればよいなと感じました。

・オンラインで参加できることは非常に便利で効率的なことだと思いますが、参加者への資料を、もう少し余裕をもって早めに送付していただけると助かります。

【シリーズ】わたしの社会教育委員活動（４）

「親子で体験　故郷創生」

多久市 社会教育委員
陣内　敬

社会教育委員になって４年目になりました。それと同時に多久市ＰＴＡ連合会の会長にも就任し、初めて経験することばかりで良い刺激を受けています。

これまでの私は学校とのかかわりはほとんどなくて妻に任せっぱなしという状態で学校での子どもたちの様子などは知るよしもありませんでしたが、東原庠舎西渓校の育友会会長に着任してからは今までの考え方がガラリと変わりました。先生方と話をする機会が多くなり学校教育や地域の方々との繋がりなどに関心を抱くようになりました。

その中での取組として地元のＪＡ関係者や農家さんたちと一緒に５年生を対象に田植え、稲刈り体験のサポーターとして活動しています。私自身、農家でもあり自然の大切さや食べる喜び、生産者さんの大変さをわかってもらえたらと思いを抱き、子どもたちと向き合っています。生徒たちの中にはとても楽しそうにしている子や先生や周りの大人から注意されている子など色々いましたが、私個人的には真面目に黙々と作業するのではなく、大変な作業を友達と話をしながら楽しんでくれることを重きに置いて考えています。この考え方が正しいとは言いきれませんが、農作業を通じて何事も楽しんで行える、そういう大人になってくれたら幸いです。

今回紹介した取組は多久市内の３校で行っている伝統的な事業になります。まだまだ他にも沢山あって、書ききれませんが、少子高齢化が進んでこれらの事業が無くなることがないように学校と地域、保護者が手を取り合って、多久の子どもたちに故郷を愛し、人を愛し、そして、両者を大事にしてくれる人になってもらいたいものです。私も故郷に恩返しをしていきながら楽しんでまいりたいと思います。

「子の親離れ・親の子離れ」

武雄市 社会教育委員
野田　初

日本各地で私たちの考えをはるかに超える事故や事件、災害が多発しています。そうした社会状況を引き起こす背景には、様々な指摘がなされていますが、隣保班である隣り近所の人々が助け合うための組織や連帯感の喪失もその一つに思えます。次代を担う青少年の健全育成に関して、地域・学校・家庭のきずなづくりについて提言されようとしていますが、30年前から連携・融合が進められてきました。平成９年に地域・学校・家庭の融合を目指して始めたのが通学合宿です。「子どもは地域の宝ばい！」の一声で、子どもの自主性・主体性・協調性の育成はもとより、「子の親離れ・親の子離れ」を目標に地域の公民館を宿舎として６泊７日にわたって実施しています。

期間中は、①家族との接触なし、②おやつ・ジュースなし、③テレビ・漫画本なし、④食材の買い出し・食事の準備・洗濯は自分たちでする、⑤入浴は近所でもらい風呂でお世話になる、⑥朝のトイレの混雑は近所のトイレを借用し済ませる、⑦仲間が困ったときにはお互いが助けあう。これらを確認し、区三役・婦人会・老人会・子どもクラブ育成会・行政・町公民館・小中学校・地元ケーブルテレビ等の協力を得て、始まりました。

学校から帰ってくる子どもたちを迎えてくれるのは、数名の老人会のおじいさんです。「ただいま！」

【夕食づくりの様子】

「おかえり！今のうちに宿題ばすましときんしゃい。当番は買い出しに行かんばらんやろう！」子どもが数人そろったところで、夕食と翌朝の朝食の買い出しに行きます。帰ってきた時には、さっきまでいたおじいさんと変わり、２名のおばあさんが、夕食作りの指導に来ています。準備がすむと、子どもたちは会食し、燃えるゴミや燃えないゴミの処理の仕方を習い、洗濯や風呂をもらいに出かけます。夜９時になると、宿泊サポートをしてくれる２名の婦人会の方が、交代で来て、翌朝の朝食指導から登校の「いってらっしゃい！」の声かけまでして帰ります。その後、10時頃から育成会のお母さん方が公民館に来て、台所の濡れているところを拭いたり、丸まって干してある洗濯物を広げたりして帰ります。当然、成果と課題がありました。

数日経った夜、就寝前に枕投げをやろうということになり、子どもが方法をたずねてきました。「誰かが泣くまでやったら！」「それはいけない！」「そしたらルールを作りなさい」ルールが出来て始まりました。しばらくして、低学年の子どもが泣きだしたので、「ストップ」の声が掛かりました。泣いている子どもを中央にして話しているのを聞いていると、中学生（リーダー的な存在）が、「ルールはみんなで決めたとばい。決めても守らんぎいかんとばい！」と言いました。

子どもは強い、やらせれば出来る、強い深い大人の干渉を求めていない。参加していた子どもの祖母が次のように話しました。

「うちの孫は家族のもとを一週間も離れて生活したことがない。寂しそうに泣きながら学校に行っていないかと心配し、玄関の隙間や庭かげからじっと見ました。そしたらどうでしょう。寂しいどころか家の方は見向きもしないで仲間と一緒に登校していました。こちらが寂しかった。母親と話しました。『子どもはあがん強かよ』」

少子化が進み、他の地区から「私たちの地区の子どもも入れて下さい」との要望があり、数年前から合同で始めた通学合宿。地域の思いは当初より変わらないのですが、コロナ禍には逆らえず、やむなく休会しています。子どもも再開を待っています。再開できるまで地域力を落とさぬように、それぞれの組織が工夫して活動しています。

【登校前の通学路の諸注意の様子】

「あいさつで繋ぐ地域住民の輪！」

上峰町　社会教育委員
重　松　規　昌

「地域の子どもは、地域で守り育てる」をスローガンに、平成16年３月、上峰町上坊所地区の住民が集まり「上坊所地区青少年サポートパトロールの会（ＫＳＳＰ）」を結成しました。

普段の活動としては、①子どもの安全を守る活動、②環境美化活動、③防犯広報活動、④夜間の警戒パトロール、⑤青少年育成を目的とした地域活動の５つの活動を行っています。

まず、１つ目の子どもの安全を守る活動については、活動スケジュールに基づいて、毎週火曜日と金曜日の週２回、小中学校の下校時間に合わせ、集団で通学路において子どもの見守り活動を行っています。活動のスタイルは、隊列を組んで、幟旗を掲げながら、専用の防犯パトロールのベストを着用して、徒歩約40分あいさつ等の声かけで通学路等のパトロールを

【パトロールの様子】

行っています。

子どもたちは、変質者に遭遇したら、大声も出せず、逃げることもできないという話をよく聞きますので、危ない思いをすることがないように、とにかく目立つ格好で見守り活動を実施しています。

また、月１回、日曜日に、子どもたちが遊ぶ公園などもパトロールを行っています。

２つ目の環境美化活動については、子どもの安全を守る活動と併せ、不法投棄の監視やゴミ拾い等を行い、環境美化活動にも力を入れています。

パトロール中にゴミ拾いを行い、その姿を見せることで、段々拾うゴミが少なくなりました。これは、ゴミを捨てる人がいなくなったということであり、私たちの姿をみて、「ゴミを捨てちゃダメだ」と思ってくれた賜物と考えています。「ゴミのポイ捨て」という小さなことですが、ルールを守るということは、小さなことの積み重ねです。

この地道なゴミ拾いも青少年育成につながっているものと思っています。

３つ目の防犯広報活動については、近隣地区の防犯ボランティアや商工会青年部、婦人会や高校生、大学生のボランティアと一緒に町内外問わず各種イベントで広報活動を行っています。

若い世代と一緒に活動を行うことで、雰囲気が明るくなりますし、モチベーションが上がり、「次も頑張ろう」という気持ちにさせてくれます。

４つ目の夜間の警戒パトロールは、年末警戒にあわせて、コンビニエンスストアや24時間営業の飲食店など、地域の子どもたちの溜まり場になりやすい場所をパトロールしています。

そこで、日頃から行っているあいさつ等の声かけが子どもたちとの信頼関係につながっており、「なるべく早く帰ろう」と気軽に声をかけ、帰宅を促すきっかけにもなっています。

最後の５つ目の青少年健全育成を目的とした地域活動については、冒頭で述べさせていただいたスローガンのとおり、「地域の子どもは、地域で守り育てる」ことが大切だと考えております。そのため、「少しでも地域の子どもたちと地域の大人たちが集まる場所づくりやふれ合う機会を増やすため、地区を上げての公民館祭りや餅つき大会の開催、年の初めには「ホンゲンギョウ」というイベントも行っています。

地域のコミュニケーションを図るためには、先ずは、「知ること」が大切です。

まず、子どもたちをよく知ることで、子どもたちとの交流により、その保護者を知り、保護者と連携すれば、絆が生まれてきます。そして、お互いを知ることで、地域全体の絆が強くなっていき、いずれは、より良い地域になっていくものと考えています。

これらの活動を通じ、最近では、変化がみられるようになりました。例えば、活動を始めた頃とは違い、子どもたちが自らあいさつをしてくれるようになりました。また、地元の小中学生から、わたしたちの活動に対する感謝の手紙をいただくようにもなりました。また、小学校のグラウンドをパトロールしている時は、少年野球の練習中に子どもたちが一斉に脱帽をして挨拶をしてくれるようになりました。

このような変化は、子どもたちの保護者等による指導があるからだと思います。その保護者たちは、私たちの活動を理解し認めてくれているからこそ、子どもたちに指導してくれているのではないかと思います。私たちは、このような時に、地域の絆が醸成されていると実感し、喜びを感じています。

今後の取組として、私たちは、活動の幅を拡げるため、自主防災に関する取組についても計画しています。

わたしは、これまでに築いてきた地域の連携をさらに強めるとともに、これまで以上に連携を取りながら「地域の子どもは、地域で守り育てる」のスローガンのもと、継続は力なりをモットーに会員が一丸となり、コミュニケーションを密にし、共通認識を持ち、「気負わず、あせらず、無理をせず」更なる活性化を図り、活動を推進していきたいと思っています。

「社会教育委員としての思い」

白石町　社会教育委員
諸岡利公

白石町は、佐賀県の南西部に位置し、西方の杵島山系から東方へ広がる広大な白石平野は、自然陸化し、幾多の干拓事業で造成され、宝の海とも言われる有明海に面している。

その素晴らしい環境の中で、社会教育委員として14年になる。最初は、社会教育委員として何をすればよいのか全く分からなかった。しかし、少しずつ地域の行事等に関わることで自分が出来ることをやっていけばよいのではないだろうかと答えを出した。

子どもが小さかった頃は、ＰＴＡ関係に携わってきたので学校の行事等に参加する事が多かった。しかし、昨年来新型コロナウイルス感染症によりいろいろな行事等が中止となっている。こんな事が起こるとは誰が想像したであろう。そのような中、ワクチンの効果なのか、感染者数はかなり減少してきた。運動会、修学旅行等が先生方の努力のおかげで行われるようになった。やっぱり子どもたちの笑顔が最高だろう。

【田植え前の説明の様子】

私は農業者なので、毎年園児が田植えと稲刈りに来る。面白いもので、年によって色々と特色がある。リーダーがいたり、女の子が強かったりで。稲刈りには鋸鎌（のこがま）を持たせ、ハラハラするが社会勉強であろう。帰りは新米をお土産。

小学生になり、久しぶりに会うと挨拶してくれる。とても嬉しい気持ちになる、これも社会教育ではないだろうか。小学校の評議員なので小学生と町探検で久しぶりに説明しながら歩いてみた。子どもたちは興味津々だった。白石町は子どもたちの減少で学校統合再編が始まっている。地域も含めて見守っていく必要があると思う。

社会教育はとても幅が広い。高齢者には、麻雀体験等で色々と知恵を出している。自治公民館活動の充実も社会教育の中の一つであろう。グラウンドゴルフ大会や、県内ハイキング等がある。自治公民館対抗のスポーツ大会も盛んであり、新型コロナの終息を願うばかりだ。

色々と活動については語りつくせない。社会教育委員は、８人いる。民生委員さんもいれば、お話し会の先生もいる。校長先生もいれば、町議会議員さんもいる。毎日走っている人や、農業者もいる。私は、このメンバーや生涯学習課のスタッフに恵まれてきたから14年間頑張って来れたと思う。委員として、一番大切な事は、自分が楽しんで務めることだと思う。

編集後記

1月の実践研修会はいかがでしたでしょうか。今年はオミクロン株の感染拡大傾向にある中での開催でした。当初からハイブリッド方式（来場参加とオンライン参加の選択方式）にしていたため、無事に開催することができました。オンライン参加ではZoomによるチャットや口頭による質問を期待していましたが、上野会長の御指名による質問だけでした。次回開催するときにはオンラインからもぜひ質問をお願いします。

今後の課題ですが、集合して視聴されるように計画されていた市町で、密になるため中止された市町がありました。個人で視聴できる方は御自宅等での視聴をお願いできたらと思いました。また、アフターコロナでもオンラインを継続してほしいという要望がありましたが、予算の関係もあり、今後の検討課題にさせてください。

佐賀県社会教育委員連絡協議会事務局（佐賀県県民環境部まなび課）
〒８４０－８５７０（住所不要）
TEL　０９５２（２５）７３１３
Fax　０９５２（２５）７４０６
✉　manabi@pref.saga.lg.jp